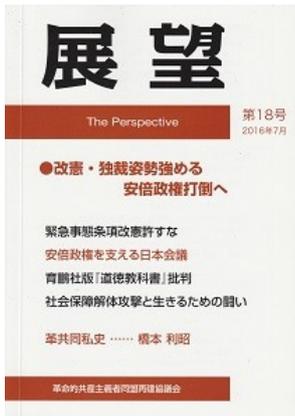


# 中核派関西の2つの「対革マル戦争総括」を読んで

大谷美芳(2022年9月19日)

当時、ブンドは中核派と解放派の壁で革マル派から守られていた。赤軍派は7・6事件と連合赤軍事件を起こした。気は退けるが、「対革マル戦争」は批判しなくてはならない。



## ①「内ゲバ革命論」という総括 そこから後退している

2016年7月の橋本利昭「革共同私史」(『展望』第18号)は、「対革マル戦争から革命戦争へ」とも言える路線を反省していた。「対カクマル『戦争』の延長上に革命があるかのような過大な位置づけ」は「間違っていた」。「対カクマル闘争の戦略化戦争化は一種の『内ゲバ革命』論」。「対カクマル闘争を『内ゲバ』と規定することにあえて反対はしない」とも。

ところが、22年7月の塩川三十二「再建協議会の総括」(『展望』第28号)は、「対カクマル戦の勝利こそが日本革命・世界革命を切り開く」という「路線」は「革命論としての歪み」とは言う。しかし、その「決定的な点」は「党と軍による代行主義」と、「内ゲバ革命論」から論点がズレている。「対カクマル闘争を『内ゲバ』などというのは間違っている」とも。

革マル派はいずれまた暴力的党派闘争にくると考えると、揺れ動くのか。あるいは、「私史」は「前進」批判、「総括」は「未来への協働」批判、論理のベクトルが逆のせいかな。

## ②そもそも革命戦争の情勢ではなかった 革命の原動力の問題 思想と戦略が未熟だった

1970年当時、社会全体は革命情勢ではなかった。確かに、大学という小社会では学生の天地を覆す決起があった(全共闘運動)。そこから、ブンドでは、赤軍派を先頭にほとんどの分派が、誤って革命戦争の情勢と考えた。中核派と解放派は、対革マル闘争の武装闘争化と革命戦争の情勢という誤った認識とが、相互に絡み合っていた。

革命の中心問題は国家権力の問題である。資本主義の土台の上に、ブルジョア階級とプロレタリア階級を基軸とする諸階級諸階層(とりわけプロレタリア階級の階層分化)の、国家権力をめぐる関係が成立している。その大局を見れば、明らかに革命情勢ではなかった。革命戦争方針が行き詰まり破綻するのは、当然であった。

戦略的な情勢認識が未熟であった。その基礎で思想が未熟であった。社会主義革命の原動力は、学生運動や主意主観ではない。資本主義が生み出すプロレタリア階級の階級闘争である。それを組織しそれに依拠する。それがマルクス主義である。しかし、理屈はともあれ実際の行動では、そうではなかった。この根本で総括しなくてはならない。

ブンド系の「資本主義批判」は、思想的にマルクス主義に立脚する作業であった。

### ③対革マル闘争 反革命規定よりも専守防衛 人民闘争の中で包囲し批判する

革マル派は、党を絶対化し目的化し、党の同心円の拡大を革命とみなし、結局は暴力的党派闘争に行き着く。「党是」。「内ゲバ反対」と批判するだけでは、とても止められない。

専守防衛の暴力でまず止めるしかない。もちろん、人民闘争の中で包囲し批判し封じ込めるのが基本であるが、そのためにも、道理と節度がある暴力は必要である。当時、全共闘運動で、新左翼は共産党と暴力的闘争となったが、大体はこのように対応できた。

対革マル派も、同じように闘争するべきであった。しかし、中核派と解放派は内ゲバの一線を超え、「革マル=反革命」規定した。それによって、「対革マル闘争=革命」、専守防衛を超えた無制限の暴力=戦争に突き進んだ。実際は、革マル派の暴力的党派闘争の構図に引き込まれ、人民と革命に利益よりも損害がはるかに大きい結果になった。当時、新左翼は八派共闘を組み、共産党と革マル派を入れなかったが、「反革命」規定はしなかった。

### ④革命党は目的ではなく手段 「党の絶対性」の清算が内ゲバ清算につながる

内ゲバとリンチは新左翼全体に拡大していた。それを基礎づけ牽引したのは、党を自己目的化し、共産主義社会の母胎 or 萌芽みなすイデオロギーであった。「党の絶対性」。

そこを「私史」はこう言う。「党が自己止揚の論理をもつかどうかが決定的である。革命が終わったら将来、国家とともに党も消滅するというだけではダメである。現在の場所的に自己止揚の論理をもつことが必要である。指導—被指導関係や、上部—下部関係、職業革命家—労働者党员の関係すべてにおいてそれが問われる。同時に党の手段性の確認が重要である。党のための党、支配のための党といった党の自己目的化はダメである。」

「対革マル戦争」で、指導と被指導の関係など党の組織に危機的な変質があったのではないかと思う。しかし、この論点は「総括」にはない。だから後退と見る。「今後の生き(行き)方の重要な点」とまで言った、この「新しい党の考え方」を堅持してほしいと思う。

赤軍派の7.6事件も、内ゲバの一線を超え、組織を維持するための暴力になった。指導者が地位を維持しようとする志向も内包していた。連合赤軍事件でそれが全面化した。組織を維持するため、さらには指導者が地位を維持するために、暴力が継続された。指導が支配へ変質した。「共産主義化」も、決意主義から、指導者による人格的支配に変質した。こういうことの全てが「党の絶対性」で隠蔽された。

党は目的ではない。目的は共産主義社会であり、プロレタリア階級の革命党は、プロレタリア階級独裁の国家とともに、目的を実現するための手段、道具である。

### ⑤プロレタリア階級独裁は一党独裁ではない 多党制と共闘

もう一つ、これは「私史」にも「総括」にもないが、プロレタリア階級独裁は一党独裁であるという誤った理解が、「党の絶対性」イデオロギーとなり、内ゲバを基礎づけ牽引した。

ソ連と中国における一党独裁は、社会主義のプロレタリア階級独裁ではなく、実は官僚制国家資本主義における官僚ブルジョア階級の独裁である。ソ連では、スターリンがトロツキーとブハーリンに対する路線闘争に勝利して、「大粛清」。中国では、鄧小平が(劉少奇を継いで)毛沢東と胡耀邦・趙紫陽に路線闘争で勝利して、天安門事件。そこで、一党独裁が、官僚制国家資本主義と同時一体的に、その国家制度として確立した。

1970年闘争では、革命を垣間見た。新左翼の八派共闘があって全共闘を指導した。基準は実力闘争、それは自己決定権とコンミュン=ソヴィエトにつながる。その経験から、その全社会化と全人民化として、将来の社会主義革命と想定できる。そうすると、プロレタリア階級独裁は、プロレタリア階級の革命党を自認するいくつか or 多数の党派が共闘して、コンミュン=ソヴィエトを指

導するのだろう。

真理、プロレタリア階級の根本的な階級的利益は、唯一絶対的に存在する。しかし、真理の認識は相対的である。プロレタリア階級を代表すると自認する革命党派は、いくつか or 多数登場する。論理的に考えても、プロレタリア階級独裁は多党制と共闘だろう。

## ⑥「神話」の清算

「党の絶対性」は「神話」である。党は目的ではなく手段と道具、一党独裁ではなく多党制と共闘、この認識で「神話」を清算する。それが内ゲバの清算、少なくとも内ゲバが一線を超えて無制限の暴力へ転化し、党の指導が暴力的支配へ変質することの清算につながる。

念のために、レーニン主義の組織論、職業革命家の中央集権的組織について。社会主義革命には、ブルジョア階級独裁に対する闘争、とりわけ革命戦争の一時期がある。少なくともその一時期、革命党の組織は、やはりそうでなくてはならない。(おわり)